

「転向」と「モダンガール」の終息

——夢野久作『少女地獄』論——

申 河 慶

第一節 はじめに

本稿は「モダンガール」を日本の一九二〇年代から三〇年代にかけての「大衆」の表象として捉える。その「モダンガール」をめぐる言説空間は、社会主義運動の「プロレタリア」観とともに、その「大衆」の解釈をめぐるさまざまなイデオロギーのせめぎあいの〈場〉を形成してきた。社会主義運動と「モダンガール」の言説がほぼ同じスパンをもって並行していたのだが、本稿ではその社会主義運動の失敗と「モダンガール」の終息が、たんなる並行した現象だったのではなく連動していたこと、さらにその際のジェンダーの再編と〈知〉の再構築とが関連するプロセスを示したいと考えている。そのためのテクストとして夢野久作の『少女地獄』（一九三六年、黒白書房）を取り上げる。

夢野久作の『少女地獄』は「何でも無い」、「殺人リレー」、「火星の女」の三つの中短編からなっており、それぞれのテクストには「家長制」社会からの解放を願う、看護婦、バス

ガール、婦人記者（を夢見る陸上選手の女学生）などの都市文化の尖端で活動する「モダンガール」が登場する。そしてこの三つのテクストは一九三三年という時間設定と謎、嘘、告白（手紙）、自殺、検死など豊富な同時代言説を共有している。

もともと少ない『少女地獄』についての先行研究はこのテクストを「モダンガール」との関連からはもちろん、充分に同時代的な観点から読まれてきたともいいがたい。それでもあえてそれらの方向性にふれるならば、久作がその少女たちを「地獄」へ追いやる社会を「反映」して描いたと解釈し、そのテクストを「夢野文学の成り立ちには欠かせない、さまざまな文体の実験が総合されている」と評価する点においては一致している。

そんななか西原和海だけが「昭和初年代の地獄の季節。テロルと転向の風景。そこを少女たちが駆けぬけようとする時、作者のペンが描くのは、やはりここでも『脳髓の地獄』と述べ、かるうじて『少女地獄』を時代状況に照らし合わせて言及しているにすぎない。しかしその評価もやはり夢野久作の代表作である『ドグラマグラ』の評価（『脳髓の地獄』の延長線上に置くこと）で既存の夢野文学の評価の枠に還元してしまっている。

これらの先行研究は三つのテクストを別々に扱おうとする傾向が強く、久作が『少女地獄』のテクスト構造として捉えている共産党崩壊のプロセスと女性をめぐる当時のさまざまな言説編成、それに「モダンガール」との関係は見落とされている。したがってそのテクストの構造によって浮き彫りにされる「未知」の崩壊と再構築の問題については何一つ答えていないのも当然としなければなるまい。

『少女地獄』の構造は作品の物語構造と、そこにサブテクストとして組み込まれる「共産党崩壊のプロセス」と「三原山投身自殺事件」という社会事象、そしてそれによって明らかにされる「未知」の三層がきわめて緻密で複雑に関係し合う円環構造をなしている。本稿はこの構造を分析することで、久作によって提示される「転向」と「モダンガール」の関係を考察することを課題とする。なお、ここでいう「転向」とは単に社会主義の放棄（路線変更）だけを意味せず、フェミニズムの天皇制ナショナルリズムへの言説再編をも意味する概念として用いる。

さらに本稿は『少女地獄』の遺書、書簡、新聞記事、噂などの形式上の諸特徴を単なる久作文学の（形式上の）仕掛けとして解釈せず、たとえば、その「転向」が「モダンガール」の日常生活を規制していく際の抑圧と抵抗の手段として捉えることをめざし、その伝達形式の政治的イデオロギー性を明らかにしていきたい。その点で新聞記者の経歴をもつ夢野久作の（新聞）メディア認識は重要な意味を持つ。久作は事件、報告書、遺書、声明文、書簡などを伝える新聞記事をテクストの題材にしつつ、そのイデオロギー性をもテクストの内部に自己言及的に書

き込む。したがって本稿では久作がサブテクストとして選択した共産党崩壊のプロセスと三原山投身自殺事件がどのように「少女地獄」にフィクション化されるかを追究することで、久作が問い掛ける「転向」と「モダンガール」の終息の関係性、そしてその際の「未知」の再構築過程において形成されていく「天皇制ナショナルリズム」をも明らかにしていきたい。

第二節 一九三三年、社会の「謎」とフィクションの「謎」

『少女地獄』は夢野久作の遺作として一九三六年、「かきおろし探偵傑作叢書」第一巻として黒白書房より刊行された。『少女地獄』の時間設定である一九三三年は夢野久作の現時点だったのである。しかしそれは単なる作者の現時点として偶然設定された時間ではなく、（作者にとつて）大きな社会の変動が起こった年としてその変動を解釈し、問い直さなければならぬ年として設定されているのだ。

日本の近代史における一九三三年は体制側の共産党弾圧と共産党の最高幹部の「転向」につづく党の崩壊、満州国の承認をめぐる日本の国際連盟からの脱退、農村経済崩壊の深刻化など政治、経済、社会、国際情勢において大きな変動が起こった年として記録されている。このようなさまざまなレベルにおける社会の激変は多くの理解不可能性、認識の空白状態を産み、それはおびただしい数の「謎」（「怪事件」）の新聞言説を生みだした。この時期の、殺人や家出などの民事事件を除く「謎」の新聞報道をいくつかランダムに挙げてみると、「謎」のリットン報

告書昨夜外務省へ徹宵して翻訳未曾有の緊張、「淀橋署を手古摺らす赤い謎の女・「大方宗子」主だった女役員?」、「学界・謎の処女地満蒙の秘境へ!大探検隊を派遣」、「警視庁書記が謎の自殺複雑した事情伏在」、「寺島中将謎の左遷海相の進退に波紋か」などがあり、ここからでも国内・国際政治の変動と体制側の情報統制による新聞報道の「謎」のありようが見うけられよう。

久作の「少女地獄」も「謎」の提示とその説明がメインプロットを構成する。「何でも無い」、「殺人リレー」、「火星の女」はそれぞれ、なぜ姫草は嘘をつのかについての臼杵医師の報告、謎の運転手・新高と友成の関係、謎の焼死体(甘川)の報道と彼女が死にいたった経緯として展開される。しかし、このような少女たちの自殺を語るフィクションにおける「謎」と社会変動の「謎」とは一見レベルが異なる問題として考えられがちだ。そのために西原和海さえも「昭和初年代の地獄の季節。テロルと転向の風景」といつて、一九三三年の時間設定と「転向」の問題を単なる『少女地獄』の「時代背景」として処理してしまつたのである。しかし『少女地獄』における「謎」は単に探偵小説の常套的な仕掛けとして解釈されるべきではない。この仕掛けは読者を作品テキストの三層構造に導き入れ、読者はその「謎」を解明することで大きな社会変動の「真相」に迫れるように仕向けられているといふべきだ。

このような久作の探偵小説の構造およびその創作方法はすでに一九三五年発表した「探偵小説の新使命」、「甲賀三郎氏に答う」という文章で表明されていた。久作は大犯人が仕掛ける謎

やトリックを名探偵が解明してみせる「本格探偵小説」を「浅劣、低級な謎々の魅力を以て大衆の注意を惹付けた」文学だと批判し、「謎々もトリックも、名探偵も名犯人も不必要なら捨てて」しまふことを表明する。その代わり自分が目指す「変格探偵小説」の創作方法は「三稜鏡(プリズム)引用者注」で旧式芸術で焦点作られた太陽の白光を冒瀆し、嘲笑し、分析して七色にして見せる尖端芸術である。従来の心理描写は平凡な心理描写に過ぎなかつた。だから将来の心理描写こそは真実な心理そのものの解析、総合でなければならぬ」のだと説明する。これはやや比喩的な表現ではあるが、久作がいう「旧式芸術」とは自然主義文学、プロレタリア文学、モダニズム文学を指しており、それらは科学精神に基づく「唯物文化」として人間の一面しか扱えなかつたという批判で、久作が模索する探偵小説は多層的な分析と総合を試みる文学だという提示である。それによつて目指される探偵小説の「新使命」について久作は次のように言及する。

この千古不滅の探偵本能を、科学が生むところの社会機構に働きかけさせ、この無良心無恥な、唯物功利道徳が生むところの社会悪に向かつて潜入させ、(中略)そのドン底に萎縮し藻掻いている小さな虫のような人間性……在るか無いかわからない超顕微鏡的な良心を絶大の恐怖、戦慄にまで曝露して行くその痛快味、深刻味、凄惨味を心ゆくまで玩味させるところの最も大衆的な読物でなければならぬ。

この引用からは二つのが指摘できよう。その一つは久作の多層的な分析と総合という方法が対象とするのは「社会機構」であり、「社会悪」を曝露する目的をもっていること。いま一つは久作が想定する作者―読者の関係性の問題で、読者は作者同様の探偵本能を働かせることで（探偵小説の謎を読み解くことで）、「社会悪」の「真相」に接近し、良心を刺激され恐怖を味わうということである。

『少女地獄』はこのような久作の探偵小説観の見事な結実だといえる。『少女地獄』には犯人も探偵も登場しない。「謎」の仕掛けも謎かけ／謎解きの作品テキストの完結のために機能せず、むしろ社会機構の「謎」に「開かれる」ように機能する。『少女地獄』の読者にとつては、作品テキストの「謎」を読み解くことで、「モダンガール」を「地獄」に陥れる「社会悪」に気づき、自分もその一部として機能しているかもしれないという良心の呵責のうえで恐怖を覚えさせられる。これを図式的にいうならば、①作品の読解→②社会事象の読解→③「知」の崩壊ということになる。本稿もこのような三層の区別をそれぞれに位置づけながら、その構造によって浮かび上がってくる一九三三年における「転向」と「モダンガール」の関係を明らかにしていきたい。

第三節 「謎の女」をめぐる新聞言説

——実社会とフィクションを架橋する「謎」

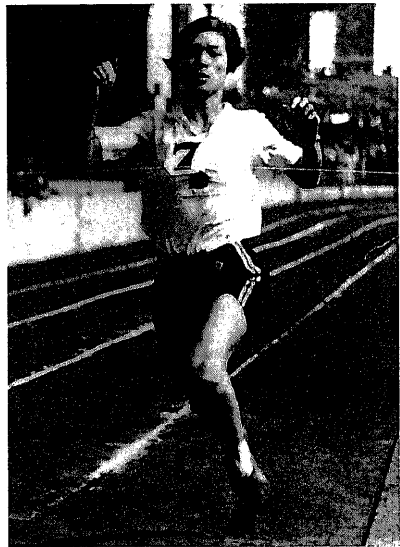
久作は作品テキストの「謎」の解読を「社会機構」の「謎」

の解明に接続させ、このテキストとサブテキストをつらぬく「謎」がもつ意味を追求する。しかしそれが「本格探偵小説」のように、久作がその「謎」を直接に解釈し、読者に説明してくれるわけではない。作品テキストの「謎」は読者に向かって投げ出されているといつてよい。読者は作者がテキストに仕掛けた「謎」を読み解かなければならない。そこでその解読を可能にしてくれるのが作品テキストの構造であり、テキストに織り込まれた新聞記事、手紙、報告書などの文書形式である。その中でも重要なのが新聞記事である。久作は「謎」として報道された新聞報道を模倣する。しかしそれはたんなる模倣ではなくフィクションとして再構成されたかたちでテキストの内部に書き込まれ、新聞言説のもつ政治的なイデオロギーに読者の注意を喚起していく。

久作は『少女地獄』において「謎」として報道された多くの新聞記事から「転向」（正確には大森ギヤング事件からはじまりスパイ査問事件に終わる共産党の崩壊プロセス）と「三原山投身自殺事件」の二つの記事を小説の題材として選択する。新聞言説では別々の社会問題として扱われるこの二つの事件は、久作のフィクション加工によって根っこにおいて深くつながるものとして仕掛けられる。それが「謎」の「真相」（深層）であり、あらかじめ結論を先どりしていえば、コミンテルンの指導下にあった日本の社会主義運動が「一国社会主義へと「転向」すること」、「モダンガール」をあらためて家父長制の支配構造に封じ込めることは深い連関をもつものと捉えられることで、既存の「知」の崩壊が予兆され、その「知」は国家的レベルで

の「皇民」観として再構築されていく、ということだ。

それでは、久作がどのようなフィクション加工を通してそのような結論に到達するのか、その構造を検証するため、まずどのような当時の言説を「火星の女」にフィクション化していくのかというところから考察していきたい。最初に指摘できるのは、「火星の女」の主人公・甘川歌枝のモデルが、日本の女子陸上競技の創生期において「天才的」なアスリートと称されていた人見絹枝だということである。人見絹枝は、第二回万国女子オリンピック大会（一九二六年、スウェーデン・イエテボリ）に出場し、百ヤード（3位）、走り幅跳び（1位）、立ち幅跳び（1位）、円盤投げ（2位）に入賞し、個人総合で優勝を飾った傑出した女性アスリートだった。また女性としてただ一人出場した、第九回アムステルダム・オリンピック（一九二八年）では八百メートル部門で世界タイ記録で第2位に入賞するなど、一時は女子陸上競技の全部門において日本記録、及び世界記録を打ち出した伝説的な女性アスリートでもある。しかし当時においては彼女の驚異的な身体能力や「男性っぽい」外見（図1）から、同性愛者だとか、実は男性だとかの噂がながされ、競技場のスタンドから「化け物！」という野次が飛ぶこともあった。驚異と偏見といったアンビバレントなまなざしをたえず向けられていた人見絹枝は、大阪毎日新聞の婦人記者として知性を兼ね備えたスポーツ選手として活躍するさなか、一九三一年二四才の若さで肺炎のため死去する。人見絹枝の社会的なイメージは、「一方ではいわば名譽男性（「スポーツ・ヒーロー」としてスター化されながらも、女性としては一種のフ



（図1）「火星の女」のモデルとなった人見絹枝選手（小原敏彦『人見絹枝物語——女子陸上の暁の星』朝日文庫、279頁）

リック的存在」として扱われたのである。このような両義的なイメージが、「火星の女」の甘川歌枝の人物像に重ね書きされる。彼女もまた男性的な外見で、驚異的な身体能力を持つゆえに、同性愛がほめかされるが、彼女はその一方で短歌が得意な「文学少女」として造型される。人見絹枝との重ね書きは大阪の新聞社に就職するという経歴をなざられるところにもまで及ぶ。

甘川歌枝の直接的なモデルが人見絹枝だったとすれば、「火星の女」のプロットの原型は、一九三三年を自殺の年として言わしめたきつかけとなった「三原山投身自殺事件」である。「火星の女」は「三原山投身自殺事件」を次のように言及する。

私は、校長先生と御一緒に、腐敗、墮落しております現代

の自分勝手な、利己主義一点張りの男性の方々に、一つの頓服薬として「火星の女の黒焼」を一服ずつ差上げたいのです。黒焼流行の折柄ですから満更、利き目の無い事は御座いますまい。

『少女地獄』は数回に渡ってこの引用に見られるようなセンセーショナルな事件報道を書き込み、その「謎」のコンテキストを作品テキストに意図的に織り込むことで「一九三三年」という年に即する読みに向かうように読者を導いていく。ここで「黒焼流行の折柄」として言及される三原山事件とはいかなる事件だったのか。そしてそれはまた、「火星の女」にどのような意図で書き込まれたのか。

三原山投身自殺事件とは一九三三年二月、実践高等女学校の学生だった松本貴代子の自殺事件を指す。この事件は級友の富田昌子が「死の案内」者として同行し自殺の瞬間に立ち会っていたというところで、大きなセンセーションを巻き起こした事件となった。それが当時の社会に及ぼした波紋は尋常なものではなく、以来三原山の火口には自殺志願者と見物人が急増し、一九三三年だけでも八三一人が身を投げ、内一四九名が死亡したと伝えられる（『読売新聞』十二月三十一日号）。それを報道する新聞記事を一九三三年に限って『読売新聞CD-ROM』で検索してみても、その数が三五〇件に肉薄し、平均してほぼ毎日一件が新聞紙上に載ったことになる。久作が「黒焼流行の折柄」と言及する一九三三年三月はまさに一般の関心が「自殺の三原山」をめぐってヒートアップしていく時期に当り、久作はそれに言

及することによって、すでに言及したテキストの読みの時空間を一定の方向に導いているわけである。

「火星の女」にはこの三原山投身自殺事件への直接言及にとどまらず、事件の当事者や関係者、その人物たちの性格や関係性までもがテキストの構成として書き込まれていく。以下それを表示してみる。

「謎」の内容	報道（叙述）方法	遺書	校長	親	その性格	事件の当事者	「火星の女」
「謎」の内容	貴代子、三枝子の自殺の真相は何か、昌子はなぜ二度も親友の自殺に立ち会ったのか、「真相を告白すれば松本家の破滅です」とは何か。	貴代子の遺書「富田宛、別の友人の松岡の母宛」	実践高等女学校・下田歌子	貴代子―母不在（三枝子―継母、家庭不和）、昌子の父親―埼玉県忍町高等女学校の教師、富田杉太郎	大自然讚美、万葉集的歌美主義、厭世的虚無主義	三原山投身自殺事件 松本貴代子（真許三枝子）（自殺）―富田昌子（自殺補助）	「火星の女」 甘川歌枝（自殺）―殿宮アイ子（自殺補助）
	その模倣、事件をセンセーショナルに報道する新聞記事―「謎の女」―事件の真相が遺書によって暴露される。	三通―アイ子、校長、メディア宛	県立高等女学校・森柄礼造（基督教信者）	継母、家庭不和、昌子の父親―埼玉県忍町高等女学校の教師、富田杉太郎	自然讚美、文学少女、厭世的虚無主義		甘川歌枝―継母（家庭不和）、殿宮アイ子の父親―視学、殿宮愛四郎

（図2）「三原山投身自殺事件」の新聞記事と「火星の女」の比較

以上の表による実際の事件報道と「火星の女」との照応からみてわかるように、三原山投身自殺事件の新聞報道、すなわち家庭内の不遇や文学少女としての鋭敏さが厭世的虚無主義を生み、それが一番の理解者である親友を死の立会人として巻き込み、自殺をとげたという貴代子（及び三枝子）と昌子の関係はそのままストレートに甘川歌枝と殿宮アイ子の人物造形の基本的な設定となつている。さらにその写実性は細部に及ぶ。たとえば事件報道の順序や遺書という装置さえもが「火星の女」のプロット展開に忠実になぞられている。のみならず、レットリックのレベルにおいても、「昌子の母親わかか昌子引取りに渡島前本郷の松本家を訪問、真許家とも連絡をとつて両家の秘密を守り、昌子の非を蔽ふことをかたく約した」（『読売新聞』二月一七日号）という報道がテキストにおける同じ新聞形式の殿宮視学の記述として「娘の将来の幸福のためにも斯様な事はなるべく世間に発表したくありません」（三七五頁）と語られるなど、その写実性は顕著だ。

実際の事件報道は貴代子がなぜ自殺したのか、昌子はなぜ二度も親友の自殺に立ち合ったのか、そして昌子が「真相を告白すれば松本家の破滅です」（『読売新聞』二月一六日号）と語つたというのがその真相は何かなど、多くの「謎」を残した（図3）まま新聞報道は断ち切られている。しかしここまで事件を忠実になぞってきた久作は「火星の女」においては甘川の遺書というかたちでその「謎」の〈真相〉が男性中心社会の偽善性や腐敗であると謎解きをしようとしていく。

久作のこのような「謎」解きは従来の社会が共有する〈知〉

の崩壊を説明しようとするものだが、その「謎」は別の巨大な「謎」と緊密に関わつてくるというのが久作の「謎」の特徴である。「謎」が「謎」を呼ぶ連鎖の構造は、その結節点において書き換えという作業が必要である。その書き換えが持つ意味は次節で扱うことにする。

この節ではいま一つ、社会コンテキストのフィクション加工の事例をとり上げておきたい。三原山投身自殺事件と時間的に並行していた共産党崩壊のプロセスがどのように「何でも無い」に組み込まれているのだろうか。久作は「何でも無い」においても次のように社会のコンテキストを書き込んでいる。

姫草ユリ子と自称する可憐な一少女が、昨春三月頃の東都の新聞という新聞にデカデカと書立てられました特号標題の「謎の女」に相違無い事です。この事実は本日面会しました前記の司法当局者に、私から説明しましたので、同氏が「容易ならぬ事件」と認めて、即刻、警視庁に移籍したという理由もそこに在る事と察しられるのですが、その新聞記事によりますと（御記憶かも知れませぬが）彼女は、その情夫？との密会所を警察に発見されたくないという考えから、その密会所付近の警察に自動電話をかけたものだそうです。（二八一—二八二頁）

管見するところ、テキストに書き込まれた一九三三年三月の号外の新聞記事には「謎の女」という見出しはみあたらない。むしろこの前後の時期は三原山投身自殺事件の昌子が「死の案

(可読報紙部三第)

第六十百二第

日刊

(日曜)

日六十月二年八第

(二)

「死の案内」全貌判然す



「死んでいった二人は、さぞ喜んでゐよう」

昌子の「異常神経」

ベンチの語りひ

天國へ手引き強要

「死んでいった二人は、さぞ喜んでゐよう」と昌子は、死んでいった二人の手引きを、天國へ手引き強要した。昌子の「異常神経」は、この事件の中心をなしている。昌子は、二人の手引きを、天國へ手引き強要した。昌子の「異常神経」は、この事件の中心をなしている。

死闘兄弟の死

「死闘兄弟の死」は、昌子の「異常神経」の中心をなしている。昌子は、二人の手引きを、天國へ手引き強要した。昌子の「異常神経」は、この事件の中心をなしている。

元京大總長の令嬢

「赤」の戦線に登場す

河上博士愛嬢の親友

元京大總長の令嬢「赤」の戦線に登場す。河上博士愛嬢の親友。元京大總長の令嬢「赤」の戦線に登場す。河上博士愛嬢の親友。

満洲事變の殊勲者

食へず強盗を働く

満洲事變の殊勲者食へず強盗を働く。満洲事變の殊勲者食へず強盗を働く。

龜井伯野から

歩兵銃廿九挺

龜井伯野から歩兵銃廿九挺。龜井伯野から歩兵銃廿九挺。

塗料工場焼く

塗料工場焼く。塗料工場焼く。

二月の選挙

二月の選挙。二月の選挙。

ボカボカ隠かに

ボカボカ隠かに。ボカボカ隠かに。

胃腸が弱いと

頭腦も悪くなる

胃腸が弱いと頭腦も悪くなる。胃腸が弱いと頭腦も悪くなる。

二人の力

二人の力。二人の力。

スキエツルマ

便秘性の

乳幼児に

スキエツルマ便秘性の乳幼児に。スキエツルマ便秘性の乳幼児に。

牛乳は阪川

牛乳は阪川。牛乳は阪川。

大門口の炎

大門口の炎。大門口の炎。

スキエツルマ

スキエツルマ。スキエツルマ。

眼検

眼検。眼検。

(図3)「三原山投身自殺事件」の新聞記事(『読売新聞』1933年2月16日号)

第五 非常時共産黨事件

讀賣新聞 號外

二府十縣に亘つて
千五百名を大檢舉す
果敢なレンパ運動を遂行し
特異なる赤魔の活動



ピストルの弾を浴び
決死隊官隊の大捕物
暴徒の代表會議を襲ふ

巨額名田の性死
左翼各報に於ける

現職判事が黨員
尾崎首相ら四名檢舉

大森初警備出動
ブルジョア子弟の

閣内紛争
東京市警備隊の大威

秘密印刷工場に
二万圓の輪轉機

河上博士大談教授
赤黨の二大雄雄檢舉

各地に高げる警備
海軍々人六名

河上博士の談事
美人局開業

大森初警備出動
赤の喫茶店

大森初警備出動
赤の喫茶店

**軍隊へ猛然と魔手
百万圓獲得計畫**

赤魔の代表會議を襲ふ
家庭製金局「軍非部」

活生下地 奇怪
魔法の即座看

河上博士の談事
美人局開業

各地に高げる警備
海軍々人六名

大森初警備出動
赤の喫茶店

大森初警備出動
赤の喫茶店

(図4) | 第五次共産黨事件」の新聞記事 (『読売新聞』1933年1月18日号外)

内者」、あるいは「謎の女」として大きく報道されていたことが想起される。しかしそれにもかかわらず、「何でも無い」がまったくのフィクションかといえはそうではなく、参照されたおぼしき社会的コンテクストがないわけではない。それは引用文にみえる「司法当局者」とは神奈川県庁の田宮特高課長と記されていること、また「容易ならぬ事件」や「密会」などのレトリックからそれが共産党とかかわる事件であることがほのめかされ、その背景にあるコンテクストとは一九三三年一月に報道された「第五次共産党事件」を指し示していると思われる。右の引用文はこれら断片化されたレトリックを通して作品テクストと共産党崩壊のプロセスを結びつけていくのだが、その相関については次節で分析する作品の構造を通してより明らかにしよう。

作品テクストの背景をなす「第五次共産党事件」とは何か。それはスパイMこと松村昇によって引き起こされた「大森ギヤング事件」(一九三三年十月六日に党の資金を得るために、黨員が家屋資金局に指揮されて川崎第百五銀行大森支店に押し入って三万円を強奪することで党の信頼を失墜させた事件)と、それに引き続き「熱海事件」(同年十月三十日、静岡県熱海に黨員・活動家が集まって共産党全国代表者会議を開き、スパイMの手引きのよって検挙され、期を同じくした大検挙によって千五百人が逮捕された事件)の捜査報告として一九三三年一月十八日に新聞に一齐に報道された事件を指す。この事件報道が社会に衝撃をもたらしたのは体制側が共産党の資金源を根絶させるためにシンパの検挙にまで及んだため、著名な知識人(河

上肇)、判事、多くの名士の子弟、女性の検挙が目立ったことであった(図4)。

その報道記事の中でも次の箇所が前掲のテクストの引用部分とぎわめて相似形であることが注目される。

同人(久喜勝一―引用者注)は既報胃腸病院を脱出して世間を騒がした大森ギヤング事件の指導者通称「お父さん」と呼ばれた者で検挙後胃腸病のため十二月十日麹町区内幸町胃腸病院に入院刑事二名が隣室に付添つて加療中内妻西村なか(二五)の手引で同月廿五日午前一時ごろ三階便所の窓から綱を伝わって逃走。

図4の新聞記事の見出しだけをみてわかるように、共産党員の暗躍と密会、そしてその逃亡を手助けする女性たちを報道する新聞記事には「謎」の属性に満ちた、探偵小説さながらのレトリックが駆使されている。久作の「何でも無い」において「謎の女」として登場する姫草ユリ子の正体不明の素性、偽装、嘘つきなどの人物造形は、同時代の社会では共産党員の検挙事件を報道する新聞言説の大きな特徴でもあったのである。(吉屋信子は三原山投身自殺事件について「なんだか探偵小説にでも登場しそうな」(『東京朝日新聞』二月一六日号)事件だと言及し、その事件の探偵小説さながらの特性を指摘している。)さらにもう一つ、この記事で注目したいのは、取調べ中に死亡した岩田義道の死因が「肺結核による脚気衝心」だとする当局側の発表について「死因について左翼陣営では虐殺だと一齐に騒

ぎ出し裁判所襲撃の虐殺抗議デーを執行」と共産党側の主張もあわせて報道する、メディアの姿勢である。新聞言説は当局と共産党の両方の主張を引用することで報道の客観性を見せようとするが、しかしそのような姿勢がかえって事件の〈真相〉をあいまいにすることで報道の作為性をも露呈してしまう。つまり、新聞記事は当局の捜査結果の発表とともに事件の〈真相〉を曖昧化するように機能するのだ。久作は「少女地獄」において三人の少女の自殺という「謎」の〈真相〉を説明していくうえで、このような当局の報告（検死）の虚偽性、新聞記事の作為性をさまざまな文章形式を模倣することで問い直していく。

このようにみえてみると、「少女地獄」の二つのテキスト、「何でも無い」と「火星の女」がサブテキストとする二つの事件がともに一九三三年三月という同じ時間設定になっているのは偶然ではない。久作のテキストは、三原山投身自殺事件と共産党が崩壊にいたる顛末とが共有していた物語性を鋭く探り当てている。その関連性もつ意味は次節以降の問題となるが、ここではただ「何でも無い」と「火星の女」は、「殺人リレー」を挟んで両者はあたかも鏡像関係にあるようなかたちで互いを参照し合っている構成だけを指摘しておきたい。それは、たとえば久作はしばしば報道された共産党員の巧みな逃避を、「火星の女」において「殿宮アイ子（十九）」という少女を同教会内別室に伴い、嚴重なる取調を行いたる模様なるが、右取調続行の都合上、同午後三時頃、前記アイ子に一応帰宅を許したるに、同女は大胆にも嚴重なる監視の眼を潜りつつ（三七四頁）といった表現でなぞってみせることや、一九三三年五月死亡した富田

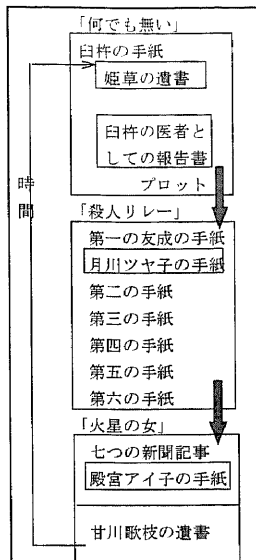
昌子の死因である脳膜炎を「何でも無い」の冒頭部に臼杵医師の手術の内容として記すなど、作品テキストと二つの社会事実と同じ時間設定と細部事項の設定によって相互に関連付けることで、それらの事件の「謎」の真相が深いところでつながっていることを示唆しようとしている。

それでは、別々の事件として語られたこの二つの事件（とそれをめぐる言説）を久作はどのような意味において結びつくとみなしているのだろうか。

第四節 「嘘つき女」と「強迫症男」の鏡像関係

前節では久作が新聞記事において別々の言説枠として報道された二つの事件を「少女地獄」のなかで輻輳する置換の可能な事象として語っていることを示した。久作がなぜその二つの言説枠をつなげたのか、言い換えれば、二つの事件（とそれをめぐる言説）はどのような意味で深く関連していると久作によって示唆されているのかについて、「少女地獄」の構造を分析することで明らかにしていきたい。

「少女地獄」は「何でも無い」、「殺人リレー」、「火星の女」で構成されているが、三つの物語を形式と主題において一つにつなぎ合わせていくのは、自殺のリレーであり、手紙のリレーである。つまり「何でも無い」は臼杵医師が白鷹医師に姫草ユリ子の自殺とそれまでの経緯を報告する手紙（冒頭に姫草の遺書を含む）で内容が構成されているのに対して、「殺人リレー」のほうはバスガールの友成トミ子が友人宛に新高の殺人と自分



(図5) 『少女地獄』における「手紙」のリレー

の自殺を報告する六つの手紙で構成され、そして「火星の女」はといえば、甘川歌枝による校長先生の腐敗の告発と自分が自殺に至るまでの経緯を説明する手紙で構成されている。

そこで、まず注目されるのはテキストの最後の遺書の時間設定(火星の女の死)が、テキストの最初の「謎の女」姫草ユリ子が登場する時間設定と一致している点である。そのプロットの展開と時間の流れを示してみると図5のようになる。

この表でわかるように、「少女地獄」は一つの自殺が終わったとき、次の新たな自殺が孕まれるという時間構造を取っている。久作は三少女が自殺に追い込まれるという時間構造を取っていると記しているが、その言葉は『少女地獄』全体の時間構造が果てしのない(無限)自殺(地獄)であることを自己言及的に示す用語でもあるのだ。

このような構造からいってもテキストの部分の読みは「少女地獄」全体の構造によって規定されているといえる。言い換えれば、構造の文脈を抜きにしては部分の解釈は不完全なものに

ならざるを得ないということである。これまでの先行研究においては「何でも無い」の天才的な嘘つき少女(姫草)についての男性医師(臼杵)の報告が言葉どおりに受け入れられているだけで、そのためにその報告にかかわって重要な語り手の虚偽性については触れられていない。さらに『少女地獄』の対立軸を形成する男女関係(語り手と語られる対象の関係)は、「殺人リレー」では殺人者(新高)が殺され、新たな殺人者(友成)が自殺するといった男女関係に変化し、「火星の女」にいたって語り手の女性(甘川)が虚偽性に満ちた男性(社会全般)に見事な復讐を果たすといった男女関係に逆転していく。つまり『少女地獄』の部分の意味はテキストの構造において変化し、あるいは裏切られるという仕掛けになっているのだが、このような『少女地獄』の構造が持つ意味を分析した先行論は見あたらない。

それでは「何でも無い」における天才的な嘘つき少女の猟奇的な行動はその構造においてどのように読み直されるのだろうか。「何でも無い」のプロットは、姫草ユリ子が臼杵医師の信用を得ようとするために、自分の正体(名前、年齢、家庭環境、前勤務地での白鷹医師との関係)を隠し、嘘に嘘を重ねていく。姫草の看護婦としての腕前は抜群で臼杵耳鼻科のマスコットになるくらい患者への対応もいい。そのような姫草が「何でも無い」こと嘘をつくのは結局女性の生理期の憂鬱症のせいだった、というふうに臼杵医師によって報告される。しかしなぜ姫草が「何でも無い」こと嘘をつくのかという疑問に対する、そのような臼杵医師の報告は、読者にはその報告の真偽性(語

り手の信憑性」を疑わせる仕掛けがテキストのいたるところにちりばめられている。

臼杵は姫草の嘘と魔力のために自分と同じ被害(？)をこうむった(であろう)白鷹に宛てて姫草の自殺を報告する手紙の最後に「A・Cのスペレーで睡魔を防ぎながらヤットここまで書いて参りましたが、もう夜が白けかかって脳味噌がトロトロになりましたから擱筆します」(二四〇頁)と述べていて、仕掛けの一端を与えてくれる。要するに、臼杵は意識朦朧とした状態にある語り手であるがゆえに、信用がおけないということである。読者にしてみれば、信用のおけない語り手が姫草の嘘の原因が生理期の憂鬱症のせいだったと断定したところで、読者は臼杵の報告に信憑性を置かなくなっているのである。このようにして読者は臼杵が姫草に絶えず嘘をつかれることで強迫観念をおぼえるようになったといっても、彼自身が信用のおけない観察者にすぎない以上、彼の強迫観念も彼の自己妄想の増幅が大いにあつたからではないかと疑わざるをえなくなる。このような疑いは読者に臼杵の「報告」全体の「真偽性」を疑わせ、テキストの再読に向かわせる。

テキストのプロットは臼杵が姫草を「謎の女」だと断定するところからはじまるが、読者はそのようなテキストの再読によってその根拠がきわめて薄弱であることに気づかされる。つまり臼杵の断定は姫草の身元保証人の発言にもとづいているがその証言自体も信憑性に欠けているのである。

あの娘は何でもこの間っから、東京中の新聞に大きく出た

「謎の女」ってね……御存じでしょう。あの本人らしいんですよ。コレ位の悪戯なら妾だつて出来るわ……ってね。

あの娘が若い衆にオダテられてウツカリ喋舌つたつていうんですの。(中略)あの娘が出て行つたアトで私に告口した者が居るんですよ。……ですからそう云われると私も氣味が悪くなつちやいましてね。あの娘が仕事を探しに行つた留守に、預けて行つた手廻りの包みの中を調べてみたら、どうでしょう。新しい小さな紙挟みの中に、あの「謎の女」の新聞記事が、幾通りも幾通りも切抜いて仕舞つて在るじゃありませんか……いいえ。ほかの記事は一つも無いんですよ。(二三四頁)

この引用は臼杵が姫草を「謎の女」として断定する証拠が単なる「うわさ」にすぎないことを示してくれる。信用のおけない観察者(「語り手」という理由はここにある。身元引受人の「口」を通して姫草が「謎の女」だと断定されるプロセスは、若い衆↓身元引受人↓臼杵医師へと口伝えてりレーされたものであり、それはなんの証拠もない疑い↓誇張・勘違い↓断定という「うわさ」が事実へとすり替えられていくプロセスを典型的に示している。このプロセスで問題になるのは「うわさ」にすぎない情報をもつて姫草を「謎の女」(「共産黨員」だと断定する人物が社会的に信用度の高い臼杵医師だという点である。「謎の女」と共産黨員の結びつきは後で考察するが、姫草が本当の暗躍している共産黨員だとするとそのような新聞記事を保管しておくはずはなく、それをもつて誇張を交えて推測す

る巷のおばさんの話を、白杵は自分の強迫観念を裏付ける証拠にしているのだ。久作がこのプロセスを描くことで示しているのは、新聞言説によって作り出された恐怖心が「うわさ」を通して人々の先入観によって歪曲・変形されながら、世間に流通するプロセスを示していることにほかならない。「うわさ」のリレーは恐怖のリレーであり、そのような強迫観念によって下された白杵医師の断定が「報告書」という「事実」としてまた白鷹医師にリレーされる。そして「何でも無い」におけるこのような「うわさ」のリレーは当時の新聞紙上で多く見られる「怪死」についての検死報告とそれを報道する新聞言説を疑問に思う一般大衆の「うわさ」のリレーを久作が構造化しているものだともいえよう。

ここまで来ると姫草の天才的な嘘つきぶりはそれにも劣らない白杵の強迫観念や証言の虚偽性と対をなしているのは明らかであり、この両者は脅威とそれに対する恐怖の鏡像関係として捉えなおされるべきであろう。言い換えれば、白杵は姫草の存在を自分の支配権を破綻しかねない脅威として意識するがゆえに、姫草の「何でも無い」嘘をつぶさに観察し、彼女の存在を否定しようとするわけである。姫草の「嘘」は、白杵の支配を転覆するための戦略であり、白杵の支配権への危機感が高まるにつれ姫草の「嘘」も増幅するのである。

それでは白杵は姫草をどのような面で脅威的存在としてみたのだろうか。その点で見のがせないのは、白杵が姫草の嘘の原因を生理的憂鬱症として診断することで、実は姫草のもつ女性性を抑圧していることである。「彼女の目付きの中に一種異様な

美しい光が、次第次第に輝き現われて来るのを発見した。それは精神異常者の昂奮時によく見受けるところの純真以上に高潮した純真さ、妖美とも凄艶とも何とも形容の出来ない、色情感にみちみちた魅惑的な情欲の光であった」(三二八頁)と述べることで、白杵は男性の支配を超越したところに存在する女性美を認識する。しかし姫草の女性美(セクシュアリティ)が白杵に脅威として認識されるそもその原因は、白杵が姫草に隆鼻術をほどこすことによって女性美の創出者として支配権にぎろうとしたが、その最初の瞬間から「飛んでもない美人にしてしまった……と肝を潰した」(二六七頁)と記されているように、その女性美を支配することはできないと感じたからである。このような《女性美の創出者として支配したい／支配できない》アポリアに陥った白杵が、「姫草ユリ子の不可思議な、底の知れない魅力……今では私の姉や妻までシッカリと包み込んでしまっている恐るべき魔力に気が付いた」と姫草の魅力が白杵を長とする家庭へまで及んだことを感じたとき、つまり家長制を脅かす存在として感じられたとき、姫草を共産党員であるという「乱暴な、卑怯に類した手段」(三十七頁)をとって警察当局に告発するのである。

「ブッ。馬鹿な……盛装の看護婦なんか連れて診察に行けるもんじゃありません」(中略)

「ハハハ。しかしその時のお話を随分詳しく伺いましたよ。まぼろしの谷とか何とかいう素晴らしい浴場がそのホテルの中に在るそうですがね。行った事はありませんが……」

「僕は聞いた事ありません。そのホテルでランサンという毛唐と一所に食事はしましたがね。まだ居る筈ですから聞いて御覧になればわかりますが、かなりの神経衰弱に中耳炎を起こしておりましたから、鼓膜切開をしておきました……」(中略)

「怪しからんです……実は今朝、貴官から、いつまでも可愛がつて置いてやるように御訓戒を受けましたが、そんな風に人の名譽に拘わる事を吐き上げるようじゃ勘弁出来ません。これから直ぐにタタキ出してしまいますから、その事を御了解願いに参りましたのですが」(三三二—三三三頁)

この引用は姫草が特高の取調べを受けた後の臼杵と特高課長との会話であるが、ここでほのめかされている臼杵の不貞の可能性はとりたてて問題とされない。問題になるのは姫草の女性としての魅力が臼杵の個人や家庭のレベルを超えて社会のレベルにまで及んだとき、臼杵は男性としての支配権への脅威として姫草を追い出してしまったところにある。脅威となる女性を「強制」的に追放したために男性は強迫観念におちいり、その支配論理は破綻する。そのことが姫草の遺書で「社会的に地位と名譽のある方々の御言葉は、たといウソでもホントになり、何も知らない純な少女の言葉は、たとい事実でもウソとなつて行く世の中」(二五八頁)として告発されるのである。

男性の支配論理の破綻は姫草の「嘘」の性質を考察することにより明確になる。すでに姫草と臼杵が鏡像関係にあると述べたが、姫草の「嘘」は男性の支配論理を被支配者側が受け入れ

て再生産した際作り出されたものである。姫草は臼杵の信用を得ようがために「まあ臼杵先生は白鷹先生ソックリよ」(二七三頁)と「嘘」をつき、それに対して臼杵は「彼女の云う白鷹先生というのは、彼女の識っている白鷹先生とは性質の違った白鷹先生であった。要するに彼女の機智が、私をモデルにして創作した……私の機嫌を取るのに都合のいいように創作した一つの架空の人物に過ぎない」(二七七頁)と認知している。姫草の「嘘」は臼杵のゆがんだ自画像であり、そのような意味で姫草は臼杵の内なる他者である。

第五節 封じ込め社会の心理構造

前節で考察したような作品レベルの分析をふまえても、「何でも無い」における「謎」——なぜ姫草は嘘をつくのか、そしてなぜ彼女は自殺しなければならなかったのか——に対する充分な「真相」が解明されたとはいえない。言い換えれば、その「謎」の「真相」は「何でも無い」をそれがサブテクストとして含んでいる共産党の崩壊のプロセスと照らし合わせてみない限り明らかにされない、ということだ。そこで「何でも無い」の時間設定、つまり「謎の女」姫草が登場する一九三三年の三月、臼杵が開業する六月、姫草が自殺する十二月が、それぞれ共産党崩壊のプロセスにおけるランドマーク的な第五次共産党事件、佐野・鍋山の「転向」、共産党のスパイ査問事件の時間と見合っているのは重要な手がかりになるう。

まず第一になぜ姫草が「嘘」をつくのかの「謎」から考えて

いきたい。「何でも無い」における白杵／姫草の関係における「嘘」は、実社会における体制当局と共産党の間の「嘘」に照応する。つまり久作は「何でも無い」において登場人物の正体不明性と相互不信を前景化することで、共産党崩壊のプロセスの中でもとりわけ「スパイ」の問題に関心を向けるのである。

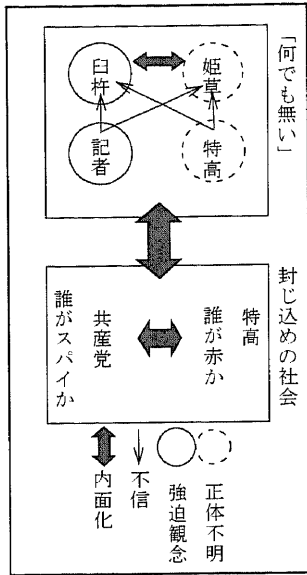
一九三三年におけるスパイ問題とは、特高が共産党の破壊策略において一番有効に活用したのがスパイであり、前述したとおり、大森ギヤング事件と熱海事件はスパイMによって引き起こされ、二月には小林多喜二がスパイ三船留吉の手引きで検挙され築地署で死亡する。これらの事実は戦後になって判明したもので、当時においてはあいつく検挙や捜索があまりにも的確だったため党内にスパイがいるのは確実であってもそれが誰だかわからず、そのことは黨員の間で相互不信の疑心暗鬼の雰囲気を生ませた。共産党は野呂栄太郎を委員長として立て直されるが、彼も十一月逮捕される。その手引きの嫌疑として中央委員のメンバーである小畑達夫と大泉兼蔵が、同じ中央委員宮本顕治らによって査問を受け、その過程で小畑が死亡するいわゆる「共産党スパイ査問事件」が起こる。共産党内部のスパイ摘出の姿勢とそれによって生じる相互不信は次の『赤旗』の記事を参照にするだけで充分だろう。

われわれは日常的政治生活において、こうした意味で疑惑のある者を発見したならば、相手かまわずいいふうらすのどなく、その疑惑者が自分の上の者であろうとためらうことなく党中央委員局長宛の密封上申書を信頼できる線へたとえ

ば「赤旗」の配布線を通じて提供すべきである。その上申書において、疑惑についての具体的事実と意見はつきり書くことだ。

この記事を引用したのはそれが「何でも無い」が捉える「封じ込め」社会の形成とその社会心理をめぐりに表現しているからである。スパイが中央委員のレベルまで浸透しているのにその中央委員に宛ててスパイを密告せよと訴えているのは、スパイ発見自体が不可能なことを認めているに等しく、しかも当時においてスパイ行動が容易く見破られるような者はほとんど存在しなかった。さらに誰がスパイなのか分からない状況では「信頼できる線」など存在するはずもなく、そのような状況は結局共産党内部で誰がスパイなのかをめぐって疑惑が疑惑を呼び、相互不信の溝だけを深くさせるだけだった。このような共産党内部の疑心暗鬼の雰囲気「スパイ査問事件」として表出したわけである。

このような社会・心理構図と同じ構図が「何でも無い」においてもみとめられよう。白杵は証拠のない「疑惑」だけで姫草の正体不明性を新聞記者の宇東三五郎に持ちかけ、彼は白杵の強迫症にもまして「君等のようなズブの素人に見える位の奴ならモウ、とつくの昔に揚げられてブランコ往生しとるてや」(三一九頁)といい姫草が共産黨員であると決め付けてしまう。彼に引かれるまま白杵は姫草を特高に引渡し(密告)、「峻烈」な取調べを受けさせる。さらに「何でも無い」の登場人物の間には正体不明性と相互不信のまなざしははりめぐらされている。



(図6)「何でも無い」における封じ込めの社会・心理構造

つまり姫草だけが正体を隠すのではなく特高も正体を隠しており(「どこだい特高課長は……遠いのかい」／「知らんかアンタ」／「知らんよ」／「知らんて君の自宅の隣家じゃないか」三一九頁)、特高と記者は「彼女と君の間には何の関係も無いチウのじゃな」(三一八頁)と云って白杵の証言を疑う。そしてすべての登場人物の言葉には「虚偽性」がつきまとう。新聞記者は姫草が無実で釈放された後も彼女を赤だと疑い(三三八頁)、特高もその表面的な主張とその内部情報は異なる(三二九頁)。久作が「何でも無い」というテキストで捉えようとしたのはこの「封じ込め」の社会状況だった。それを図式化すると次のようになる。

この図6で明らかになるように、久作が「何でも無い」における天才的嘘つき少女を描くことで見せるのは、強権的な支配権力の弾圧が引き起こす被支配者側(社会全般)の相互不信という病理性である。それによって形成される「封じ込め」の社

会において人々は「何でも無い」ことでお互いを密告し、その人は「何でも無い」ことで逮捕され、拷問され、死んでいく。このような「封じ込め」の社会は体制側が、例えば隣組のように、一方的に作り出したものではなく、共産党のスパイ摘出の過程でもみられるように、支配側の権力構造を鏡像的に内面化していく中で形成されていくものである。姫草の「嘘」も、それに白杵の強迫観念も単に個人に限られる特性ではなく、「封じ込め」社会のシステムが派生させる病理であったのである。

このプロセスは全体社会においては往々にみられる傾向ではあるが、久作の洞察力が光るのは、「モダンガール」を中心に「封じ込め」社会の形成を捉え返している点にある。この問題が第二の「謎」、すなわち姫草はなぜ自殺しなければならなかったのかという疑問にかかわってこよう。白杵は姫草を特高に引き渡し、「家父長制」の支配権力の危機を国家権力に訴えることで乗り越えようとするが、これは「知」のレベルにおける「家父長制」の「天皇制ナショナルリズム」への再編成としていえるのだが、その課題は稿をあらためて詳しく考察する。

そしてこのような作品テキストの論理性はまた共産党崩壊の顛末に照応する。ここで注目されるのが一九三三年六月の佐野・鍋山の「転向」声明文である。この声明は第三インターナショナルの国際主義が日本共産党を労働大衆から乖離させたとその誤謬を指摘することで「国社会主義を主張し、天皇制という日本の君主制を容認し、日本帝国からの植民地分離を否定する」という主な特徴をもつものだった。このような共産党最高幹部の天皇制を容認する「国社会主義への「転向」は「家父長制」

の改編のうえに再編されつつあった「天皇制ナショナリズム」を強力にバックアップする結果をもたらした。体制当局は共産党員の異様なまでに不屈な活動の原因をその背後にあるコミンテルンの存在としてみなし、そのつながりを絶たせようとした点である。「家父長制」の再編のうえに形成されつつあった「天皇制ナショナリズム」はその枠に収まりきれないファクターを排除することでのみ可能になった論理だったのである。

本稿はここまで『少女地獄』のなかでも主に「何でも無い」を中心に考察してきた。しかしすでに示したように「少女地獄」の部分の読みはテキストの全体の構造に強く依拠しているため、ここまでの分析だけで『少女地獄』の構造が示してくれる意味を十分に提示したとは言いがたい。久作が『少女地獄』の構造を通して示してくれる、社会主義運動の失敗と「モダンガール」の終息の連動性、その〈知〉の崩壊とそれの「天皇制ナショナリズム」への再編という〈知〉の再構築の問題は稿をあらためて考察していきたい。

【注】

- (1) 拙稿「モダンガール」という言説空間(『文学研究論集』第二号、筑波大学比較・理論文学会、二〇〇三年三月)、「消費」と「モダンガール」——菊池寛「受難華」論(『日本語と日本文学』第四二号、筑波大学国語国文学会、二〇〇六年一月)を参照された。
- (2) 川崎賢子「極東の少女／少女の極北」、江口雄輔「夢野久作主要作品案内」「ユリイカ」第二巻第一号、一九八九年
- (3) 川崎賢子「夢野久作文学博物館」『国文学 解釈と教材の研究』第三

六巻三号、一九九一年

(4) 西原和海「解題」『夢野久作全集8』筑摩書房、一九九二年、四四八頁

(5) 「読売新聞 CD-ROM」において、「謎」という検索語で調べた結果に基づいた。

(6) 夢野久作「甲賀三郎氏に答う」『ぶろふいる』昭和十年十月号(『夢野久作全集11』筑摩書房、一九九二年、七四頁)

(7) 小原敏彦「人見絹江物語——女子陸上の暁の星」朝日文庫、朝日新聞社、一九九〇年

(8) 河原和枝「スポーツ・ヒロイン」『スポーツ文化を学ぶ人のために』井上俊、亀山佳明編、世界思想者、一九九九年、一四〇頁

(9) 夢野久作「少女地獄」黒白書房、一九三六年、二七八頁。以下「少女地獄」からの引用は、本文中に頁数だけを記す。

(10) 共産党員と「謎の女」の結びつきは次の記事から容易に読み取れる。「第五時共産党事件」報道の同日の「読売新聞」朝刊には「淀橋署を手古摺らす赤い謎の女・「大方宗子」主だった女共産員？」という見出しで、マイナーな共産党員の逮捕が報道されている。この記事は逮捕者の中の二女性の名前を言わないことで困った取調の様子を伝え、「第一留置人名簿にも「名なし」とは記せない関係上、先年錦町署にもあった如く自己姓名をも名乗らない留置人に「オオカタ、サウダラウ」と命名(？)した例もあるので「大方宗子」とでも名をつけて調書を作成するよりほか方法がないといつてゐる」と記している。

(11) 江口は前掲の文章の中で「注目されるべきは、ユリ子の遺書の日付が、彼女の「生理的憂鬱症」の時期と重なる点である。この時期になると彼女は惹かれたように虚言を口にする傾向にあったのだから、遺書も自殺も虚構の可能性は十分だ」という指摘からその典型的な例が見られよう。

(12) 松山明重「うわさの誕生」『ユリイカ』第二巻第一号、一九八九年

(13) 松山明重「日共リンチ殺人事件」恒友出版、一九七七年、六六一—六三頁

(14) 『赤旗』第一四〇号、一九三三年六月一日

(15) 「過去は誤り獄中の佐野・鍋山共産思想を清算」『東京日日新聞』、一九三三年六月十日

(16) 鍋山は戦後のあるインタビュの中で、戦前共産党とコミンテルンの関係について次のように述べる。「鍋山―それは、コミンテルンという世界共産党組織があつて、また権力を牛耳っているスターリンが神のごとき存在であつたというような諸事情から、モスクワの決定だ、モスクワの意向だということになれば、有無をいわずそれに従わざるを得ないというふうな空気があつたことは事実ですな。(中略) そういう理論に対する、あるいは言辭に対する子供らしい忠実さともなつて、コミンテルン絶対主義ということばざしたる疑念もなぐやつておつた」松本明重、前掲書、五八―五九頁

【付記】

本稿は論の展開上、論旨を十分に尽くしていないところもある。続稿として「転向」と「モダンガール」の終息(続)―夢野久作『少女地獄』論』を『文学研究論集』(第二五号、筑波大学比較・理論文学会、二〇〇七年三月発行)に発表した。

(シン) ハキヨシ 筑波大学大学院博士課程

人文社会科学研究所 総合文学)